

アドラー心理学に学ぶ個人と組織のあり方

困難を克服するまで待てず、いらいらする人を見ることがある。強いかんしゃくと激情をもって絶え間なく動いている人がいれば、そのような人は強い劣等感を持っているといつも断言してよいであろう。自分の困難は克服できると知っている人は、いらいらすることがない。必要なことをいつでもできるわけではないとしてもである。

アルフレッド・アドラー

今月は、心理学の泰斗で「個人心理学」を創始したアルフレッド・アドラー (Alfred Adler, 1870年2月7日-1937年5月28日) の言葉を取り上げました。冒頭の一節は、アドラー心理学の入門書「個人心理学講義」(岸見一郎訳)からの抜粋です。アドラー心理学というと、「器官劣等性・劣等感・優越追求」や「共同体感覚」が主な概念的枠組みとされていますが、ここにも「劣等感」という言葉が出てきます。

さて、これを読んで皆さんはどのように思われたでしょうか。自分をいらいらさせる原因は、相手方や周囲にあると思われる皆さんには、ピンとこないかもしれません。まして自分の劣等感が関係するなどとは想像できないのではないのでしょうか。しかし、同じ状況であっても、いらいらする人とそうでない人がいるのは、人それぞれの性格、いわば心の問題であることは確かなことであると思われます。また、同一人が同じ状況にある場合においても、相手方と親しい関係にある場合などには、いらいらすることは少ないと思われ、やはりこういったことから納得していただけるのではないのでしょうか。

仮に、今まで述べたことが納得できたとしても、それが劣等感と何の関係があるのだと思う方もおられると思います。劣等感を持つということは、自らの弱点を認識しているということであり、それを克服するために努力するなど、それが良い方向に向かえば、各人の人間的成長にとっては、むしろプラスになるものです。また、他人の痛みを分かるという観点からも、社会的な生物であるヒトにとって必要なものと思われます。

この一節で述べられている「劣等感」は、厳密に言えば、「劣等感コンプレックス」と言われるものと思われます。「困難を克服するまで待てない人」は、困難を克服できないのではないかという不安や焦りなどに付きまといわれており、その不安定な心の状況が「劣等感コンプレックス」と思っていたいただければ、分かりやすいのではないのでしょうか。

それでは、「自分の困難は克服できると知っている人」とは、どのような人でしょうか。それは、自らの弱点や劣る部分をしっかりと認識するとともに、他者の協力等を得ながら、自らの能力や長所を「正しい方向に活かせる人」のことではないかと思います。

そのために、アドラー心理学のもう一つの重要な概念である「共同体感覚」がポイントになってきます。アドラー心理学は、個人と社会との関係性をとても重視した心理学であり、共同体の一員として「共同体感覚」を持つことが、個人の幸福にとってとても重要であることを唱えています。この「共同体感覚」は、共同体の一員としての認識がいわゆる「腹落ち」しており、自らの行動の内的規範となっている状態のことでしょう。この関係性は、個人と組織の間にも当然当てはまります。我々一人ひとりが、組織の一員としての「組織体感覚」をいかに持ち、それを保っていくことができるのか、そのことを探求し続けていくことが、組織を良い方向へと導く「鍵」となるのではないのでしょうか。

令和7(2025)年7月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明